

1951年、東京に出て大学に入った。この大学は国立の外国語学系二期校（東京外国語大学）であったが、私が専攻を許された英米学科は、当時の戦後間もない英語ブームを反映してか、受験の競争率だけでいえば全国トップの位置にあった。しかし、校舎は、田舎者の私でさえこれが大学かと嘆かせるほど貧弱きわまりないので、旧制の高等専門学校から新制の大学として誕生したばかりの、内面外面ともに無理強いされた構造を目の当たりに見る思いがあった。

入学試験の一環として面接というのがあった。他の大学にあったかどうか確認していないが、この外国語大学には4つの関門があり、まず進学適正検査による足切りの生き残り組が大学独自の筆記試験を受ける権利を与えられ、次に筆記試験に合格した者のみがあらためて身体検査と面接試験を受けるような仕組みになっていた、と記憶している。いまにして想像すれば、小規模ながら高専から大学に昇格したという輝かしさと責任の重さを大学当局が強く認識した結果、面接までして受け入れるべき学生の品質を追求し、自覚をうながしたということだろう。

ところで、この面接によって私に植

え付けられた印象ははなはだよろしくない。まず、試験カウンター右隣の面接官—太縁のメガネをかけ、エネルギーに満ちあふれた少社の教官—が、君の英語の成績は50番目、つまり合格者中のキリであるが、全科目の総合得点が上位であり、それで入学を許した、というようなことをのたもうた。ついでに、英米学科の定員は70名のところ、今年度は英語の成績が規定のレベルに到達していないため、実際に入学を許可したのは50名である、とものたまに、君が文字どおりの英語ビリッケツであるぞとのご託宣があった。次に、中央に座している気品に満ち恰幅の良い紳士が、当学は周知のように語学を最重視しており、とくに英米学科に入学する者は、たとえ受験時の成績が下位であっても、当学の学生として選ばれたのだから、その点に誇りと責任をもって勉強してもらいたい、いいですね、と念をおされた。被面接者である少年の私が、はじめ顔面蒼白となり、次に総身に震えがきたことは想像にかたくない。あとで直ぐわかったが、このときの面接官は、前者がThe World through English（私の高校時代の英語リーダー）の編纂責任者であり、また当時ラジオの英会話で全国をならした小川芳男助教授、後者が辞書の権威岩崎民平主任教授（ともに、その後、学

長をご歴任)であった。

大学の門をくぐるときから、こんな風であったから、私の大学時代は少しも華やかではない。厳粛な事実の告知による自信喪失が引き金となって、私の学に挑む心は一向に芽生えず、ついには挫折...と結果は知っているが、それでも私は私なりに大学(といっても、主として前期の教養課程にしばられるが)におけるくわかもの>時代を経験した。たぶんに「ごまめの歯ざしり」的な色彩が濃いのは承知の上で、今回は、信州の山猿が大学の英語およびその周辺をどのようにならうろついていたか、回想風に綴ってみたい。

英語の授業は、学生の姓名をアルファベット順に並べて A、B の 2 クラスを編成し、1 クラス 25 名で行われた。私は頭文字が M であったため、A 組の最後に名前を列ねた。教室は、教官のいかんを問わず、例外なく 2 つのグループに自然分裂し、最初から外大志望の東京と神奈川勢 10 人程度が最前列から 2 列目くらいにかたまって席をとり、そのうしろ中央付近が思いっきり空いて、最後列から前方よりにばらばらと地方勢(出身県が全員異なる、ほとんど一期校落っこち組)が座った。私は、もちろん後方席である。

前記の小川助教授には発音学 phonetics (英米学科の学生には必須科目のひとつ)を教わった。教科書は、ロバート H. ゲルハード (Robert H. Gerhard, Ph.D.) 著の A Handbook of

English and American Sounds であった。

(このテキストはいまでも私の手元にあり、奥付を見ると発行元は神田淡路町の清水書院、発行年月日は昭和廿四年四月三十日、定価は金三百八十圓とある。背表紙は剥がれて、その内側の補強用古紙には信用調書の原本らしき和紙が使われている。)この発音学では、初回の講義で私はみごとに赤っ恥をかいた。助教授は、教室に現れるといきなり、アルファベット各文字を含めて英語独自の母音子音を表記した発音記号の音声テストを始めたのである。私のあたりでは、子音の [p] がきたが、何回やっても母音の入った [pu] の域を出ず、とても助教授を満足させるわけにはいかない。そこで、彼は、マッチをすって火をつけ、それを私の口元すれすれにかざし、もし火が消えないようなら即刻転学を考えるべし、とほのめかして脅した。この両唇破裂の子音は、とうとう私の消火活動では扱いきれず、ここに少なくとも英語の発音環境ではミスフィットである事実の再確認を余儀なくされたのである。以来、私はずっと英語の発音恐怖症である。(ちなみに、小川芳男先生は日本の英語界に多大の業績を残され、新設の神田外語大学学長を最後につい最近亡くなられた、謹んで哀悼の意を捧げる。)

講義名は忘れたが、毎週 1 時限、岩崎民平教授の授業があった。岩崎教授は、研究社がいわゆる「岡倉英和」の第 2 版 (1936 年) を出してから、太平洋戦争の空白期を経て、1953 年に新英和大辞典 (大型第 3 版) を完成した際

の編集員（他に、市川三喜、河村重治郎両先生）であり、私が教室でその謙虚なお姿を拝していたころ、一大偉業にご専念なさっていたということになる。当然、辞書における語義の決め方などについて有益なお話があったはずだが、学友の背中越しに先生の端正なお顔が見え隠れしたことは覚えていても、中身については残念ながら覚えていない。なお、先生はリスニング力にも重点を置かれ、毎時限の始めに長さ10~15語程度の英文を2回ゆっくり読んでこれを書き取らせる練習を課した。[l]と[r]、[b]と[v]などの違いを正しく聞き取って文の意味を変えずに単語を綴るのだが、全体が10点満点で1箇所間違えると-1の減点となるので、はじめの内は大部分の学生がマイナス点であったように思う。名詞の tears（涙）と動詞の tears（引き裂く）は発音が異なるから注意しなければならない、など細かい点にも言及された。小川先生の発音学にはほとんど参ったが、岩崎先生の授業には何とかついていけたのはどういう理由があつたのか、この謎は現在も解けない。

英文学の講義に安藤一郎教授の Shakespeare 講読があつた。テキストは四大悲劇のひとつ Macbeth である。安藤教授は、アメリカ現代史の権威であると認識していたが、同時に詩人としても有名で、その年度は秋口になると国際詩人会議の日本代表としてヨーロッパへ行かれたために、後期の授業はほとんど休講だった。しかし、私は Shakespeare を原書で読むことに強いあ

こがれを抱いていたので、合計15回程度の授業でもその満足度は高く、その直後から「沙翁」の作品に傾倒し、自らの力でいくつかの悲喜劇を原書で読むという一時期をもった。先の発音学のテキストと同様、いま手元に残っているのが The Arden Edition of The Works of William Shakespeare, "The Tempest" である。The First Folio（ファーストフォリオ判）から始まって "Tempest" Criticism（批評）までの10項目80ページにおよぶイントロもよく読んだ形跡があるし、また本文には至る所付けペンによる英語の朱書きが入っていて、40余年前の私の沙翁に対する狂信ぶりが彷彿とよみがえってくる。Act Iの19行目に more better というのがあって、これは Double comparative, common in Elizabethan English と注記され、赤ペンでアンダーラインを引っ張ってあるのは、話の種としての知識を得た単純な喜びを表象したものか、また、120行目の Good wombs have borne bad sons... を青インクの万年筆で尤もらしく囲ってあるのはどういう魂胆か、いまは知るべくもない。

故郷からの友人に早大文学部社会学科哲学科といういかめしい学科に在籍する M.T. 君（残念ながら、若くして故人）がいた。彼はさかんにハイデッガーやサルトルの名前を羅列して、その思想を私たちに披露してくれたが、その一方で日本語を介しての沙翁作品については私よりよっぽど造詣が深かったように思う。私が原文で読む

Shakespeare にく凝っている>ことに反対はせず、むしろ面白がっていたが、研究者になっても食って行かれないよ、と忠告することを憚らなかつた。「年齢を少し重ねたある日、水さん（私のこと）が得意満面で沙翁論を吐いても、その発見や意見とおぼしきものはすべて世界のどこかですでに発表されている。なんせ、おびただしい数の Shakespeare 研究者が存在し、その研究成果を書いたアーカイブはまさに「汗牛充棟」の感ありさ」というのである。私には、この友の忠告に抗するだけの確固たる信念はなかつたようで、以後 Shakespeare を楽しく読み、かつ無難に語る一市井のシンパとして自分を方向付けることになった。（と書くと、いかにも分かった風な態度をとったようだが、実際には沙翁と中世英語から逃げ出したのである。）

沙翁関連の話をもう少し続けたい。

早大のキャンパスの一角に坪内博士記念演劇博物館（私たちは「エンパク」と呼んでいた）というのがあった（現存）。M.T.君と誘い合わせてしばしばかよった。正面入り口の上方にラテン語で<世界は舞台なり>という文字が刻まれ、沙翁時代の劇場の外容を彷彿させる建物であったと記憶する。入り口に通じる歩道の両側にほとんど朽ち果てたともいえる木製のベンチが銀杏並木のかげに隠れるように2つ3つ並んでいて、私たちはそこに腰を据え、あれこれと語りの時間を持った。晩秋の夕べ、銀杏の葉を金色に敷き詰めた「エンパク」の周辺には、16世紀後半

から17世紀前半ころのイギリスがこの風景の中にしのび入ってくるようなイリュージョンがあった。館内に入ると、1階のガラスケースの中に沙翁の作品のフォリオが何気なく置かれていたが、その大判の見開きにおどる中世英語の文字群には圧倒的な重みがあった。私は、目にとびこんでくる文字を1字いちじ、驚ペンを使って写し取りたいという誘惑に駆られ、ついにはそれを実行したような記憶があるが、夢を現実と見誤った結果かもしれない。

ある日の閉館まぎわ、もう誰もいない館内で、ガラスケースから去ろうとしない私を不審に思ったのか、ひとりの教授風の紳士が声をかけてきた。そのとき、私は正確には何と受け答えしたのか定かでないが、「君はよく見かけるがここの学生ではないね、今日は私がつきあってやろうか」「それは恐縮ですが、たいへんありがたいことです」といった内容の会話があって、結局各階を案内していただいたことがある。何階目かに歌舞伎関係の資料がまとまって展示されており、そこには歌舞伎「東海道四谷怪談」で使われている<がندوق返し>の模型があった。紳士は、その模型を実際に動かして仕組みをていねいに教えてくれた。しばらく経って、M.T.君にこの話をしたところ、それほんとのことかと目を丸くした。「彼を誰だと思っているんだ、水さん、そりゃ一間違いなく河竹先生だぜ」—これには、私も驚いた、そして同時にその偶然の幸運を感謝した。氏は当時早大教授で、演劇博物館の館

長をなさっていた歌舞伎研究の権威河竹繁俊先生その人だったのだ。

再び私の大学に戻る。

教養課程後半で、アメリカ現代文学の講読を担当されたのは龍口直太郎教授（早大の講師も兼任）である。John Ernest Steinbeck の「二十日鼠と人間」

（Of Mice and Men）をテキストに使われた。龍口教授は、そのころ売れに売れていた翻訳家で、私たちは「翻訳工房」の大ボスなどと陰口をたたいていたが、三笠書房その他で次々と出版されるアメリカの小説には訳者名にこの先生の名前が必ずとっていいくらい含まれており、またその名訳に若者たちは熱狂的な信者となった。ただ、多忙が原因だったのか、大学での授業内容はかなり通り一遍的なところがあり、私を含めて数人の学生が不満のあまり「何か」を恐るおそる訴えたことがある。結果はどうであったか覚えていないが、当然教授の怒りにふれ、学年末の成績評価はやはり悪かったと思われる。教授は、程なくして、外大教授から早大教授に鞍替えしてしまわれ、外大の方は講師になってしまった。

教養課程には英作文もあって、これは海江田進助教授の教えを受けた。海江田先生は大学受験参考書ですでに盛名を馳せておいでになり、たまたま2年次のクラス主任だったため、世田谷のご自宅まで級友たちと遊びにいったこともある。英作文は、高校時代での経験が浅かったこともあって苦手な学生が多く、私なども進んで授業に参加

するという意欲に失せており、いま考えると忸怩たるものがある。英作文ができない、英語がうまく書けない、と嘆きの声をぶっつけたら、「君たちには書こうという気持ちがないのではないか、あるいは書きたいという内容を持っていないのではないか。日本語だってそうだろう」とたしなめられた。これはやられた、と反省したが、以後その叱責を抱き続けて45年になる。

さて、今回は前号の中高時代を受けて、大学生になったばかりのころを中心に、私の英語体験を書いた。生まれて初めて東京という大都会に入植し、おそらく「人間至る所青山あり」くらいの気概はあったに違いなく、したがって大学時代に得られた体験も豊富であったはずだが、こと英語に限定すると内容はこんなものである。英語以外の世界を掘り起こせば、新たに知り得た、また体験したものは泉のごとしなどといまさら自負しても始まらない。しかも、英語をキーに浮き彫りしたのはすべて、自己研磨を怠ったために私の青史の中ではくすんでしまっている。要するに、環境が良くても勉強しなければ何にもならない、という世話物の語り弾きである。力のおよばない者がくやしがる、すなわち、ごまめの歯ざしりをあらためて反芻した次第。（なお、次回に書くチャンスがあれば、こんどは「泥沼からはい上がった—実務英語の世界」というタイトルで華麗なる転身をはかり、名誉挽回といきたいところだが、はてさて……。）